

「手」に託す、この思い



鈴木さんは、教内の手話講習会で講師を務めるようになって4年目。受講生と会話をしながら授業を進めていく
(おやさとやかた東左第5棟で)

ど こか、分からないところはありますか？」

同時期、親里で開かれた「手話通訳ひのきしん者養成講習会」。講師の鈴木義雅（45歳・猿澤分教会教人・東京都足立区）は、手話で受講生に問いかける。「ろう者と楽しみながら会話することが、手話上達の一番の近道」。講習会の際は、なるべく多くの受講生と話すようにしている。

未信仰家庭に生まれ、3歳のとき耳が聞こえていないことが分かった。「障害に対して、社会的認識がまだまだ低かった時代。両親の悲しみは、大きかったと思う」

それでも「両親には人一倍、厳しく育てられた」という。「ろう者だからといって甘やかすのではなく、普通の人より2倍も3倍も努力するよう言われ続けた」

5歳のころ、ろう学校幼稚部に入学した。それまで家族とは、口話（唇の動きを読み取る読唇と発声で行うコミュニケーション）で話していたが、友達と手ぶりでコミュニケーションを図る中で自然と手話を身に付けた。

小学5年生のとき、普通小学校へ転入。そこで初めて「聴者の社会」と出合う。「授業で、先生の話すスピードについていけなくて……。その分、自宅で一生懸命に勉強した」

ほかにも「ろう者の社会」と異なるところはたくさんあった。たとえば、ろう学校では人に話しかける際、肩をたたくのが当たり前。教室で同じようにして、同級生を驚かせてしまうこともあった。

「聞こえる文化、と聞こえない文化、には、大きな違いがある。どちらも接点を持たなければいけない私がある」

お道と出合ったのは、25歳のとき。もともと信心深く、仏教に興味を持っていたが、ある日、友人の祖母に聞かされた「八つのほこり」の教えが心に響いた。

誘われるまま、おぢばへ帰って別席を運んだ。そのとき手話通訳してくれたのが、布教部福祉課員の比見正雄（故人）だった。別席の話で分かりにくいところを質問すると、丁寧に教えてくれた。「比見先生との出会いは、とても大きな出来事だった」

その後、修養科を修了。大教会に5年間住み込み、比見の紹介で天理教聴力障害者布教連盟（＝聴布連）の活動にも参加し、信仰を深めていった。

「聴布連では、教理を手話で表現する難しさを、いつも痛感している。『稿本天理教教祖伝逸話篇』の話も、読んで理解はできても、手話で説明するのは容易ではない」という。

現在、地元の「ろう者協会」の理事を務めている。目指すのは、ろう者と聴者が支え合い、共に活動できる場をつくること。

「人の喜ぶ顔を見るのが、私にとっての喜び。日々喜んで通る私の姿を通して、どんなことにも感謝の心を持つ大切さを、周囲の人に伝えていきたい」